

ディレクター日誌（活動・研修生の様子）

期 日：前期…令和元年8月17日(土)～26日(月)【9泊10日】

後期…令和2年度での指導研修

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家及び県北部山域（山口市阿東）

研修生…県内の教員・大学生

1日目「開会式・ダッフルシャッフル・バックパッキング」

期 日：令和元年8月17日（土）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家～筋ヶ岳登山口P

令和元年度の研修会が始まった。今年度の研修生は様々な年齢構成の6名（男性4名、女性2名）で、研修会への意欲の高いフレッシュなメンバーが集まった。サマー学校のスタッフからの紹介で参加を決めた研修生が多く、改めてスタッフ間のつながりを感じる研修会のスタートとなった。研修会スタッフは、参加者一人ひとりが最大限のチャレンジをする中で、大きな達成感を味わえるようサポートをするとともに、来年度以降スタッフとして活動に関わってほしいという願いをもち、これからの10日間を過ごしていく。

開会式では、自分自身のチャレンジを思い切り楽しんでほしいということと、嬉しいことも辛いことも含めた全ての体験や仲間との関わりを通して、新しい自分と出会えるような素敵な10日間にしてほしいということ話をした。何よりスタッフがまず1日1日を心から楽しんで過ごし、自然やこのプログラムの魅力を伝えたいという思いを共通をもってスタートした。

午前中は、装備の準備やダッフルシャッフルを行い、10日間の準備をする。物の名前や使い方も分からない中での活動だが、インストラクターとサブインストラクターが1つひとつ丁寧に説明しながら、ザックの中に次々と物品を詰めていく。参加者は、初対面の緊張感を感じながらも、和やかな雰囲気の中でダッフルシャッフルが進んでいった。

昼食をとったら、早速荷物を積み込み、国道沿いの筋ヶ岳登山口の入り口までバスで移動した。

いよいよ、本日のテン場（宿泊地）である筋ヶ岳登山口駐車場をめざして、バックパッキングが始まった。真夏の日差しを浴びながらアスファルトの上を歩くことの厳しさ、日陰のありがたさを感じながら、重たい荷物を持って歩く初めての活動である。歩き方や休憩の取り方、地図とコンパ



スの使い方などのレクチャーを受けながら、順調に歩みを進め、17時にテン場に到着した。

テントやタープの張り方、テン場での決まり、食事のルール等を学び、テキパキと作業が進んでいく。今夜のメニューはマカロニシチュー。温かい夕食を囲み、少しずつ会話が増えてきた。



食後のミーティングではキャンプに参加した目的や、本日の活動を振り返っての思いを共有し、翌日の行程を確認した。ミーティングは、個人の思いを共有したり、グループの課題を話し合ったりすることで、体験を学びに変える重要な時間である。これからの10日間の体験を通して、どんな思いを伝え合い、グループがどのようなチームに成長していくのかとても楽しみである。

2日目 「バックパッキング」

期 日：令和元年8月18日（日）

場 所：筋ヶ岳登山口～筋ヶ岳・弟見山～仏峠



2日目の始まり。前日のミーティングで、5時半起床、8時出発と決めていた。予定通りの5時半に起床し、朝食、パッキングを進め、出発したのは8時40分だった。今日も、さわやかな晴天。1日のチャレンジを応援するような穏やかな天候に恵まれ、気持ちのよいスタートとなった。初日に荷物の重さに心をくじかれそうになっている参加者も見受けられたが、少し体が慣れてきたのか、気合い十分元気に歩き始める様子が見られた。

いよいよ山の中に入っていく。筋ヶ岳山頂までは3つの登山道があるが、今回は松の木尾根ルートを選択し、登っていった。初めての急登に苦しみながらも順調に歩みを進め、11時前には筋ヶ岳山頂に到着した。ここからは、県境を示すため

の盛り土や杭を確かめながら、ひたすら県境を歩いていく。15時すぎに弟見山着。お互いに声を掛け合いながら、元気に17時50分テン場となる仏峠に到着した。

到着後は、冷たい川の水に足をつけたり、バンダナで顔や体を拭いたりした。1日の疲れが吹き飛ぶ瞬間である。

夕食のラーメンを食べた後は、本日のミーティング。今日の活動を振り返りつつ、インストラクターから目標設定の話があり、個人の目標を1枚の紙に記入した。

- 自分を再発見する。あきらめない。挑戦。
- 子ども達に話せるようなネタをたくさん作る！
- 自分を見つめ直し、人のことを考えられるようになる。
- 魅力的な人になるための挑戦
- 自分が限界の時に周りにいる人のことを思いやれるようになる。
- 進化！自分の限界への挑戦

この10日間は個人のチャレンジでもあるが、6人のグループとしてのチャレンジでもある。まずは個人の目標を目に見える形にして共有し、これからグループの目標等を書き加えたり、修正したりしていくことになった。



3日目 「バックパッキング」

期 日：令和元年8月19日（月）

場 所：仏峠～三ツヶ峰（三ツ頭）～桐ヶ峠～クォーツバレー

3日目の朝を迎えた。前日のミーティングで、早く起きて早く出発して早くテン場に着いてディップ（川での水浴び）をしたいと話していた。予定通りの5時起床。起きてからの行動もテキパキと無駄なく動き、朝食、トイレ、パッキングと自分たちで時間管理をしながらスムーズに進めていた。わずか2日間のトレーニングで、山での過ごし方が身に付いてきている様子である。

今日の予定は当初、仏峠から三ツヶ峰（三ツ頭）を越えて桐ヶ峠に行き、古江堂まで下りてテン場をとるという行程だった。しかし、今日の午後から明日の午前中にかけて警報級の雨が降るという予報が出ていたため、スタッフで話し合った結果、安全を考えて、テン場を古江堂ではなくクォーツバレーにすることにした。

7時33分、元気に仏峠を出発していった。歩き始めから三ツヶ峰までは急登が続く。一歩一歩踏みしめるようにペースを守って進み、10時半に三ツヶ峰山頂に到着した。少し早い昼食をとっていると、この旅初めての雨が降り始めた。ちょうどザックを下ろしていたので、カッパを着て、ザックカバーをつけて歩き出すことができた。研修生にとっては、タイミングのいい雨の降り出し方だ。その後は何度かのアップダウンを繰り返し、桐ヶ峠をめざす。笹がきれいに刈り取られており、地形の様子やコンパスワークから現在地を確かめるトレーニングを重ねながら、13時12分に桐ヶ峠に到着した。

ここからクォーツバレーまでは、長い下りである。ただでさえ足場の悪いところだが、今日は雨も降っている。お互いに声を掛け合い、支え合いながら、安全に下ってきた。クォーツバレーのテン場に着いたのが、16時38分。

研修生の疲労もピークに達しているので、この日はスタッフが湯を沸かし、雑炊と味噌汁で体を温め、早めに就寝することにした。



4日目 「バックパッキング・ソロ入り」

期 日：令和元年8月20日（火）

場 所：クォーツバレー～願成就奥

今日は、クォーツバレーから願成就奥まで移動してソロ入りという行程である。朝になっても雨が降り続けていたため、出発時間を遅らせ、昨夜できなかったミーティングを6時から行った。ミーティングでは、これまでの行程で「がんばったなと感じる場面」と「もっとこうしたらよかったなと感じる場面」を出し合い、これからの行程をみんなで楽しく歩きたい、失敗を生かす、時間を意識して行動するという思いを共有することができた。



クォーツバレーから願成就奥までの移動には、途中から山の中に入って地図とコンパスを頼りに行く方法とロード（道路）で行く方法とを考えていた。当初の予定であれば、今日の行程は山歩きの中では一番ハードな道のりである。山で地図読みのトレーニングをするべきか、早くテン場についてソロに入れるべきかについてスタッフで話し合った。

その結果、研修生にとってソロの時間を長く確保する方がよいのではないかと考え、ロードで願成就奥をめざすことにした。クォーツバレーを9時10分にスタート。順調にロードを歩き、12時35分にテン場に到着した。

歩いている間にポツポツと降っていた雨もやみ、昼食の後はお待ちかねのディップタイム。昨日古江堂にテン場をとっていればディップができたのだが、テン場の変更によりそれが叶わなかった。初めての全身ディップである。昨日の雨のおかげで水位が増して、ゆったり浸かることのできるポイントができていた。研修生の楽しそうな声が聞こえていた。

ディップを終え、さっぱりした後、インストラクターからソロについての説明を聞き、17時前に全員ソロへと入っていった。いろいろなことを考える時間はたっぷりあるので、まずはゆっくりと体を休めてほしいと思う。

5日目 「ソロ」

期 日：令和元年8月21日（水）

場 所：願成就奥

ソロはそれまでの「動」に対して「静」のプログラムである。研修生にとって、疲れた体と心を休める時間であるとともに、「自分」や「他人」、「それまでの出来事」を見つめ、自分を振り返る貴重な時間である。今年度は、行程の変更によりソロを2泊することができた。この間、話がしたくても1人で黙って過ごさなくてはならない。ソロサイトで研修生が動くことができる範囲は、自分で設置したソロトップ（小さなタープ）下の半径約2mだけである。時計もなく、今が何時かわからない状況でひたすら自分と向き合う。また、夜の暗闇の中で、じっと息をひそめて夜明けをひたすら待つことになる。



今までの4日間と違って、静かに時間が過ぎていく。スタッフによる何度かの見回りの際には、多くの研修生が睡眠で体を休めている様子が見られた。いかに前半の道のりが過酷だったかを物語っているようであった。

それぞれの場で、研修生がどんなことを思い、どんなことを考えながら過ごしているのか……。明朝、ソロ明けのミーティングでどんな話が聞けるか、とても楽しみである。つかの間の休息で身も心もリフレッシュし、新たな気持ちで後半戦に臨んでほしい。



6日目「ソロ明け・ファイナルツアー」

期 日：令和元年8月22日（木）

場 所：願成就奥～白井トンネル～上宇津根



早朝6時前、夜明けの光が少しずつ森の中を明るく染めていく。2晩別々の場所で過ごした仲間との久々の再会である。ソロ明けの参加者を待っているのはフルーツパーティー。豪華なフルーツの盛り合わせを目にして、参加者から感嘆の声が上がった。

しかし、簡単には食べられないのが指導者研のフルーツパーティー。声を出してはいけない、自分で食べない、という2つのルールが科せられる。これも仕掛けの1つ。2晩も人と会話をしてこなかった反動で、いろいろな話をしたいけどできない。あれも、これも食べたいから取ってほしい。いろいろな「伝えたい」という気持ちが大きなジェスチャーとなり、大爆笑に包まれる。楽し

くも和やかな時間を過ごしつつ、ひとしきり盛り上がった後は、ソロで感じたことを共有した。

パッキングをする前に、サブインストラクターから物品の管理について話があった。みんな真剣な顔で話を聞いている。その直後、箸が1本足りないことに気付く。全員でタープの周りを探してみるが見つからない。木の枝と同じような色をした竹箸なので、簡単に見つかると思えない。最後の望みをかけて、ソロサイト近くのテン場に戻り、探し始める。そして、なんと箸を発見。みんなの思いが通じた瞬間だった。これまでなんとなくパッキングして持ち運び、使用してきた物品について考え、自分たちの行動を振り返るよい学びになった。



ここからは2日間のファイナルツアー。今日まではインストラクター、サブインストラクターがしっかりとトレーニングをし、少しずつ距離を置いて活動を研修生に委ねてきた。ここからは研修生だけのツアーとなる。今日までの学び、グループとしての成長をいかしたツアーが素晴らしいものになることを願う。

出発前に、研修生とスタッフで確認を行った。偵察に行く時には、必ず2人以上で行くこと、もしも迷ったら自信があるところまで戻ること。ソロやフルーツパーティーでの充電を終え、新しい食料によって重さを増したザックを背負い、9時25分に元気に願成就奥を出発していった。

今日のルートは願成就奥からロードを通過して、大坪または白井トンネルの辺りから山越えをする。研修生には、どちらのルートを進むのか決まったら無線で連絡するように伝えていた。無線に入ってきたのは、「大坪から行きます。」という声だった。

白井トンネルから行くのではないかと予想していたので、少し驚きはしたが、みんなで決めたルートを進む研修生を全力で応援しようと心に決めた。大坪の入り口を通り過ぎ、過ぎた分来た道を引き返して11時30分に林道を登っていった。12時30分にはスキー場北側の鞍部に着くが、そこから地図上にはない作業道をどんどん進んで行くことになる。現在地が分からなくなっていたようだが、そこから尾根をめざして急登を登り、無事に県境にたどり着くことができた。これまでの経験から、尾根を歩いている感覚には絶対的な自信があったので、県境をどんどん進み、15時半頃には白井トンネルを通過していた。



しかし、地図とコンパスで現在地を特定することができず、疲れと不安が頂点に達したとき、研修生からの無線が入った。インストラクターとの交信で、二重テーピングを発見し、現在地を特定。そこからは、順調に地図とコンパスで進行方向を調べ、みんなで意見を出し合いながら、見事上宇津根の峠にある道標にたどり着き、18時半に上宇津根のテッ場に到着した。日暮れまでにテッ場に着くことができなければ、どこかでレスキューに入ることも視野に入れていたが、グループだけの力でテッ場にたどり着くことができた6人がとても頼もしく思えた。



タープやテントを張ったり、食事の準備をしたりするのも全て自分たちだけで行う。大雨が降っていたが、6人で明日の行程やグループの目標についてのミーティングをじっくり行えたようである。明日は、5時に起床して、7時に出発する予定である。明日のファイナルツアー2日目がとても楽しみである。

7日目「ファイナルツアー」

期 日：令和元年8月23日（金）

場 所：上宇津根～十種ヶ峰山頂～グレンデ

7時。無線の向こうからいつもの元気な声で出発の連絡が入る。昨日下りてきた峠まで登り、そこからは県境沿いに十種ヶ峰をめざす。峠からはまず、急な上り坂が研修生を待ち受ける。約100mの高低差を一気に登り切ると、息を切らした研修生の無線連絡が飛び込んできた。ここまで1時間弱。順調なスタートである。

地図読み、歩くペース、休憩の取り方、楽しみながら歩く工夫、自分たちがこれまで積み重ねてきた技術や経験を総動員して、一步一步確実に進んでいく。林道に出ると、少し道が崩れていたため引き返し、作業小屋までは県境を歩いた。さすが、尾根には絶対的な自信があるチームである。作業小屋からの林道には、何度か分かれ道があるが、そこも確実に地図を読み、十種ヶ峰の山頂へと続く道を選択することができた。林道が終わると、残りは稜線をひたすら山頂をめざして登る。

スタッフは先に山頂に上がり、研修生の登頂を待つ。山頂は少し雲がかかっていたが、これまで歩いてきたルートを見渡すことができ、今日までの行程に思いを馳せた。

13時30分、ついに山頂到着。これまでの努力と苦勞を讃え、目に涙を浮かべながら抱き合って喜ぶ姿がそこにあった。みんな



「やりきった」という充足感に満ちた晴れやかな表情をしている。美しい景色に囲まれて昼食タイムをとる。十分山頂を楽しんだ後で、方丈原に向けて下山開始。気の緩みに気をつけて、下りもみんな楽しく会話しながら進んでいく。

15時50分、テン場となるグレンデに到着。

その夜のミーティングでは、ファイナル2日間の行程を振り返って感じたことを口々に共有した。コースの選択の際には楽な道を選んで後悔するよりは困難な方に挑戦したいと話し合っ大坪からチャレンジしたこと、キーワードが「笑顔で終わろう～あいの3ヶ条 伝え合い 助け合い 認め合い」に決まったこと、夜テントの中で鞍部の数を数えたこと、ファイナル1日目の反省を生かして全員で地図読みをして進む道を決めたこと等、2日間の思いが溢れ出し、ファイナルツアーがいかに充実したものだったかを再確認できる素敵なミーティングだった。ファイナルツアーの途中、研修生が勢いだけで進んでいるように見え、このままでは危険なのではないかとスタッフは考えていた。しかし、研修生の言動から、今まで学んだことを生かそうとしている姿や、迷っていることを理解して道を見つけようとしている姿が見られたので、全力で応援したいとスタッフの心は動かされた。「冒険は危険を冒すものではなく、準備をして臨むもの」、この言葉の意味を実感し、深く心に刻むことのできた2日間であった。



8日目「クリーンナップ・グループツアー・ロッククライミング」

期 日：令和元年8月24日（土）

場 所：ゲレンデ～自然の家～ロックサイト～嘉年体育館

ゲレンデで8日目の朝を迎える。今日からは、コンクルーディングと呼ばれる最後のフェーズ（期間）に入る。グループチャレンジを終え、研修生一人ひとりが日常生活に戻っていくために、個人のチャレンジに踏み出していく。今日は、ロッククライミング。ザイル（ロープ）でつながっている仲間に支えられながら、自分の目標に向けてどんな取り組みができるかというチャレンジとなる。仲間からの励ましを背に、自分の壁から一歩踏み出す素敵なチャレンジをしてほしい。



起床後、パッキングをして自然の家に向けて踏み出す。ゲレンデから元気な出発の合図を響かせ、最後のバックパッキング。本当に素敵なチームである。

到着後はクリーンナップ。1週間、山での生活を支えてくれた道具達を、感謝の気持ちを込めて磨き上げていく。ロッククライミング前にできる限りのクリーンナップを済ませるために、黙々と作業を進めていく。

クリーンナップが一通り済んだところで、今度はマウンテンバイクのトレーニングに入る。インストラクターから、乗り方・降り方、ギアの変え方、ブレーキのかけ方など、安全な走行の講習を受ける。ある程度慣れてきた所で、練習を兼ねてロックサイトまでマウンテンバイクでのグループツアーを行う。

ロックサイトで昼食を済ませた後は、いよいよロッククライミング。グループを2班に分け、その中で役割分担をしてお互いのチャレンジを支えていく。岩に登るチャレンジャー、ザイルを直接持つピレイヤー、ピレイヤーの動きに合わせてロープを出したり束ねたりするロープマネージャー。誰もが全ての役割を経験することになる。

最初のチャレンジが始まる。自分の設定した目標に向けて、手がかりや足を乗せる所を探しながら、自分でルートを探していく。なかなか思うように登れないときには、仲間から様々なアドバイスがとぶ。一人のチャレンジをみんなが応援する温かいグループの雰囲気、**「もう無理かもしれない」と思うチャレンジャーをもう一歩先へ、上へ押し上げていく。一人、また一人とチャレンジを終えていくが、どの研修生も心から満足できたという晴れやかな笑顔を見せ、そして支えてくれた仲間への感謝の言葉でいっぱいになる。**

最後、高いところを苦手とする一人の研修生のチャレンジが始まる。自分の設定した目標は達成していた。しかし、途中で下りたらきっと後悔する。後悔しない選択がしたい。半分を超えたあたりから、なかなか登れなくていらいらも溜まってくる。残りの5人の仲間もスタッフも一丸となって応援し、**「こうしたらどう？」「ああしたらどう？」**というアイデアとともに、**「がんばれ！」**という声が飛び交う。がんばってい



るのに、がんばれって言われても……。 「がんばれ！」の言葉がきついついときがあることを知った。 チャレンジャーは何度もあきらめそうになりながらも、後悔しない選択がしたい、前に、上に進もうと懸命にもがく。とうとう目標を達成し登り切ったときには、下で支えた仲間から大きな歓声が上がった。一人の懸命な姿が、メンバーの心に響き、チームの結束がさらに高まる感動的な時間となった。

ロッククライミングのチャレンジャーとビレイヤーの関係は、教室での子どもと先生の関係に似ている。自分たちの力で成長しようとしている子ども達を、先生が無理に引っ張り上げようとするのか、子ども達に合わせて支援していくのか。人を支えることへの責任や意味を強く感じることでできるロッククライミングとなった。



その後は、マウンテンバイクでテン場となる嘉年体育館に向かう。今日はテントではなく体育館泊となった。翌日は最後のチャレンジとなるサイクルマラソン。励まし、支えてくれる仲間は側にいないけれど、その存在を心に感じながら、個人チャレンジの総仕上げを行う。

9日目 「サイクルマラソン・クリーンナップ・ラストナイトミーティング」

期 日：令和元年8月25日（日）

場 所：嘉年体育館～須佐～津和野～十種ヶ峰青少年自然の家

9日目の活動はサイクルマラソンである。初日から今日に至るまで、何の縁もゆかりもない、奇跡のように出会った6人がそれぞれの目標とグループの目標に向けて常に一緒にチームとして活動してきた。ステキな仲間になったが、明日の閉会式を終えると各自の生活に戻っていかなくてはならない。このサイクルマラソンはそれぞれの生活への旅立ちの儀式である。6人がそれぞれ目標を設定し、その達成に向けて頑張る。そしてそれは競争ではない。個人のチャレンジだが研修会に参加するまでと違うのは、9日間同じ思いを共有し、体験を共にした他の5人の仲間も同じように頑張っているところである。側にはいないが、離れていても理解し合える仲間がいる。そのことを感じつつ頑張ってもらいたい。その感覚は明日以降に実生活に戻っても同じである。

まずは、嘉年体育館からサイクルマラソンのスタート地点となる弥富まで、グループツアーで移動する。昨日に比べて、マウンテンバイクの扱いにも慣れ、随分ペースが上がっていた。順調に弥富に到着する。

ここからは、個人のチャレンジ。自分のスタートしたいタイミングで、近くにいるスタッフとじゃんけんをして、あいこになったスタッフに自分の目標を告げて走り出す。コースは須佐手前まで行って折り返し、1日の総走行距離が約75kmとなるコースである。途中10ヶ所のチェックポイントでは、仲間の言葉を読みながら、更にそれぞれが自分のことや仲間のことに思いをはせてメッセージを書き込んでいく。



始めはほぼ下り坂。ということは、折り返した後は上ってこなくてはならない。復路のことを想像すると気の重くなるスタートだ。しかし、折り返した仲間と反対車線ですれ違うことが、モチベーションアップにつながったようだ。



津和野に抜ける峠までの山登りで、多くの研修生が相当の苦しさを感じていた。今まで共に支え合った仲間も今は側にはいない。それでも、自分の目標とチェックポイントで仲間から受け取るメッセージをエネルギーに、歯を食いしばって進む。個人でのチャレンジという時間が、逆に仲間の存在の大きさを感じられる時間になったようだ。



津和野からはまたひたすら上り坂が続く。特に十種ヶ峰に向かう最後の坂は想像を絶するものであるが、14時半から16時の間に全研修生が無事にゴールに辿り着いた。スタッフとしては、一番怪我の多いこのサイクルプログラムで、今年も全員が安全に事故なく戻ってきたことが何より嬉しかった。どの研修生も、疲れの中に精一杯やり

切ったという晴れやかな表情を見せていた。

全員が自然の家に戻ってからは、クリーンアップの続きと最後のテン場となるホット小屋の掃除を行う。夜はスタッフの手で準備したちらし寿司パーティー。

ラストナイトミーティングでは、9泊10日を振り返って研修生1人ひとりがお互いに感謝を伝え合うサンクスを行った。それぞれのメッセージを聞く度に、1つひとつのエピソードが思い出される素敵な時間となった。



10日目「サービス・クリーンナップ・閉会式」

期 日：令和元年8月26日（月）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家

最終日はクリーンナップの合間にサービスがある。OBSではプログラムの中でトイレの整備などを行うサービスも重要なプログラムである。今年度も同時期に開催されている中高生のクエストプログラムの手伝いを行う。中高生は今日が最終日でマラソン（個人ラン）を行う。このマラソンは研修会のサイクルマラソンと同じ目的で設定されている。そのコースの各所に安全確保のために研修生が配置された。来年以降スタッフとして関わる時に、スタッフがどのように運営しているかを知る機会でもある。そして前日に同様の体験をしている研修生は今一番中高生の気持ちにより添える立場である。コースの安全確保が大切であることを身をもって知っている研修生たちは、スタッフの視点に立って、最後の子が通過するまでチャレンジをしている中高生たちを支え、声援を送った。そして、全参加者がポイントを通じた後、各ポイントから1人ずつ合流して6人で自然の家に帰ってきた。

午後の閉会式の前にそれぞれが感想を記入し、バンダナ（＝修了証）に寄せ書きをした。仲間を想い、笑顔で思いを伝え合う、温かい時間を共有できた。

閉会式では、この6名で研修会を過ごせたことに対する感謝の気持ちと、今後も仲間となってサマースクールに携わり続けてほしいという願いを伝えた。最後にインストラクターの話の中で、研修生相互に行う修了証（バンダナ）授与を行った。それぞれに照れながらも、誇らしい笑顔で受け取る姿が見られ、10日間見守ったスタッフの1人として、胸が熱くなった。泣きたくなるぐらい苦しいことも、心が震えるほどの嬉しいことも、様々な経験を胸に旅立っていく6名の研修生を見送りながら、来年度以降、今度はスタッフとしてどんな活躍を見せてくれるのか、今から楽しみである。「行ってらっしゃい！またね！」

